

今に伝わる 秩父の人形芝居

江戸時代から明治期農村の娯楽として全盛を極めた人形芝居も、その後衰退の一途をたどりその多くが中止に至っています。秩父には数か所の伝承地がありますが、現在は三か所の人形芝居が伝統文化を受け継ぎ上演できます。一人遣いの横瀬人形。二人遣いの白久の串人形。三人遣いの出牛人形と操作の違う三種類であり、語りも説経節と義太夫節が語られるのも特徴です。

山間の秩父に受け継がれてきた素朴な人形芝居を観、説経節や義太夫節をお聴きください。
なお、埼玉県内ではほかに三芳町竹間沢の車人形が上演可能であります。

実行委員会／顧問 枋原 嗣雄
(元埼玉県文化財保護審議会委員)

県指定無形民俗文化財



しろく くしにんぎょうしばい
白久の串人形芝居

江戸末期、白久の豆早原地区の人が、宴会で箸に手拭いを巻き付け人形の形にし、説経節に合わせ踊ったのが始まりと言われている。

明治七年（1874年）、江戸豆人形の頭38個を買い求めたのが今の人形であり、衣装や舞台を作り二人遣いの操り方による人形芝居が生まれ興行が行なわれるようになった。

白久の串人形は全国でも珍しい二人遣いである。主遣いが左手で人形の支え棒を持ち、右手で首につながる篠竹や引き栓を操作して、首（頭）や目・眉を動かし表情を付ける。手遣いは、主遣いの後ろで人形の手首に差し込んである竹串で人形の左右の手を遣う。二人の呼吸が要求される。

県指定無形・有形民俗文化財



よこぜ にんぎょうしばい
横瀬の人形芝居

安政年間江戸の説経節の三代目薩摩若太夫が三峯神社参詣の折り、旧荒川村小野原（現在秩父市）の宿屋で若太夫から地元の坂本藤吉（薩摩若登太夫）と共に、横瀬の若林又右衛門（現横瀬人形若林家の先祖）が指導を受け、薩摩佐登太夫を名乗り（後に若松佐登太夫）、説経節に人形芝居を取り入れた。

横瀬の人形は一人遣いで「ふくさ人形」とか「秩父人形」などと呼ばれ、人形の背中から右手を入れ、人差し指と中指の間に首の下部の胴串を挟み、親指と小指に人形の手を結び付ける。

また、人形芝居には珍しい襖や彫り物のある正方形が廻る豪華な廻り舞台を持つ。音曲は三味線の伴奏による説経節を語る。現在弾き語りの出来る自前の太夫が数人育っている。

県指定有形民俗文化財



じゅうしじょう り にんぎょう
出牛浄瑠璃人形

かつては中山道筋の本庄・児玉方面から秩父への重要な道筋で、「出牛の宿」（現皆野町）として栄えた地に伝わる三人遣いの人形である。義太夫も大変盛んで不動堂には大正三年の義太夫連の奉額に九十名もの名がみえる。芸座には安政二年（1855年）の銘がある。

人形は主遣いが人形の首と右手、左遣いは人形の左手、足遣いは人形の足裁きといった役割で黒衣装に頭巾をつける。

この出牛人形は不動様の縁日に三番叟の人形を飾り供えたり、雨乞い人形とも呼ばれる菅丞相の人形を飾り祈雨を願ったり、人形の持つ呪力や信仰が今でも生きている。